九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

唯物史観と家族理論 : 玉城教授の批判に答えて

青山, 道夫
九州大学法学部教授

https://doi.org/10.15017/1412

出版情報：法政研究. 28 (1), pp.1-18, 1961-09-30. 九州大学法政学会
バージョン：
権利関係：

唯物史観と家族理論

——玉城教授の批判に答えて——

青山道夫

一

私は家族法を学ぶものとして、また家族の歴史に関心をもつものとして、しばしばモルガンやエンゲルスの家族学説をとりあげ、また批判した。そのような私の論文の一つである「家族学説の諸問題」(一)のうちの「唯物史観と家族理論」が、先般、愛知大学の玉城肇教授によって批判された。(二) この論文の中で、私はエンゲルスの「家族、私有財産および国家の起原」(一八八四年)初版序文に示された、唯物史観の根本に関する彼の著名な命題をとりあげたのであるが、私の理解の仕方に玉城教授は異論をさしはさまれたのである。しかし、玉城教授の解釈が正しいかというと、私はかならずしもそうは思わない。だいたい、私の見解は、私独自のものではなく、従来の学説の上にたったものである。そして玉城教授は十分引用されなかったが、エンゲルスのこの命題をめぐり、多くの学説が提唱されている。それで、私は、本稿において、直接に玉城教授の所説を批判するかたちをとらず、これまでの学説を整理して間接に玉城教授にお答えし、御教示を乞うことにしたいと思う。

今年はエンゲルスの「家族、私有財産および国家の起原」(以下「起原」として引用)の初版が出版されて以来ちょうど七十五年であり、また改訂版である第四版の出版後七十年になる。私は「起原」を記念すべきこの絶好の年に

おいて、その内容を正確に知ることに努めたいのである。

二

私はさきにあげた論文において、『唯物史観的立場において家族についての最初にしてかつ重要な点は、家族がいわゆる上部構造かそれとも下部構造かの問題であろう』といい、この点についての基本的観念を示すものとしてエンゲルスの「起原」のなかの命題を引用した。そしてこれに対する私の見解をも示したのであるが、玉城教授はこの私の見解を批判されるのである。まず問題となる「起原」の命題はこうである。

『唯物的見解によれば、歴史における究極の決定的契機は直接的生命の生産及び再生産である。しかしこれはそれ自体また二種類にわかれる。一方では生活資料、すなわち衣食住の対象の生産及びそれに必要な道具の生産、他方では人間自身の生産、種の繁殖。その下において一定の歴史的時代および一定の国土の人々が生活するところの社会制度は、二種類の生産によって、すなわち一方では労働の、他方では家族の発展段階によって制約される。労働がなお発展していなければいないほど、その生産物の量、したがってまた社会の富が制限されていればいるほど、益々強く社会秩序は血族紐帯によって支配されるようである』(三)

この命題の解釈をめぐって学説が岐れていることは、玉城教授も承知されるとおりであるが、これはわが国ばかりではなく、ソヴェトの学説においてもそうである。

ところで、玉城教授によれば、私はソヴェトのエンゲルスに批判的な学説の影響を受けてエンゲルスの誤まりを指摘する学者の一人として登場したというのであり(四)、玉城教授の引用する私の説というのは次のものである。

『…私としてはこれらの批判(マル・エン・レーニン研究所などの批判)の方が論理的にいって正当と思うのである。…種の繁殖の基礎

たる生殖行為は、人間にあっては自然的関係であるとともに他面においては社会的関係である。すなわち婚姻や家族はその基礎においては人間性それじたいに基くが、制度として存在すると考えるならば、その社会の家族の在り方を規定するものは、少なくとも唯物史観に立つならば、その社会の生産力であり、未開社会の家族だけがその例外となるとは考え難いのではなかろうか。…乱婚や集団婚の仮説を生産力と結びつけてひき出すことの困難なことがエンゲルスの二元論を生んだとは考えられないだろうか…』(五)。

そしてこの私の見解に対して玉城教授は『ここに述べられている「生産力」とか、「人間性それじたい」とか、或いはまた「家族のあり方」とか「制度としての家族」とかの概念のあいまいさはとにかくとして、青山教授の指摘によると、エンゲルスは明らかに「二元論」であり、それは唯物史観的方法からすると全くの誤まりであるというのである。すなわち正しい唯物史観的方法からすれば、一定の社会における家族のあり方（制度としての存在）を規定するものは、如何なる時代であっても、その社会の生産力（おそらく同教授はこの場合、生産力と生産関係とをあまり明確に区別しておられないのではなかろうか）であるといわなければならないというのである』と批判されたのである。(六)

玉城教授はさらにすすんでエンゲルスの前記の命題の後の部分の言葉すなわち『労働がなお発展していなければいないほど云々』を重要視すべきものとされ、それによりつつ自説を展開されているが、それはそれとして、私はいちおう以上に示した私の立場を玉城教授に答え、そしてさきに述べたようにこれを契機としてエンゲルスの「命題」についての学説を整理してみたい。

三

エンゲルスの「起源」において展開された彼の家族発展の理論は、すでに周知のように、モルガンの「古代社会」（一八七七年）の基礎の上に立つものである。エンゲルスは「起原」の初版の序文において、『まことにモルガンは、マルクスによって四十年前に発見された唯物史観をアメリカにおいて独自の仕方で新に発見し、そして未開と文明とを比較しつつ、主要な諸点でマルクスと同一の結果に到達したのである』(七)といい、『われわれの書かれた歴史の…先史的基礎をその大綱において発見し復原し』(八)たものとして「古代社会」の価値を高く評価した。ところでこれに関連してなされたエンゲルスの唯物史観についての見解が、命題としてさきに示したものなのであり、それがマルクシズムの正しい立場に立つものか否かが問題とされているわけである。

私が最初にこの命題を問題としたのは、もう十年以上も前である。当時はこの命題をとりあげたわが国の文献はきわめて少なかった。私の参照したかぎり、エンゲルスの命題を支持する学説の方が多かったので、私は『問題がこれで十分解決済みであるかどうかは若干疑問である』という留保を附して、この『エンゲルスの立場は唯物論を正しく把握したものとして理解されねばならぬとされる』といってこの命題を紹介したのであり(九)、これはだいたいソ連百科大辞典版「歴史唯物論」およびヴェー・ライハルト「前資本主義社会経済史論」によったのである。

ところで、その後ソヴェトの学説はきわめてエンゲルスに批判的な方向へ発展した(学説の大要はのちに掲げる)。玉城教授から批判された私の立言はそれらの学説に基づくものであり、私の言葉に不完全さがあるとするならば、それは是正するとして、私としては玉城教授から直接にこれらのソヴェトの学説に対する批判こそを聞きたいのである。がそれはそれとして、私が近時のソヴェトの学説の方が論理的にいって正確と思うと発言したことは、玉城教授の指摘によれば、『エンゲルスは明らかに「二元論」であり、それは唯物史観的方法からすると全くの誤り』と私が考えていることになっている。(一〇) しかし私がエンゲルスの二元論といったのは、ここに問題になった命題に関してでだけで

あり、エンゲルスの学説全般についていっているのではない。私としては、エンゲルスが正しい唯物論者であるかどうかを全面的に批判する能力はない。ただ家族の歴史に重要な意義をもつこの命題だけを問題にしているのである。そしてその限りにおいて、エンゲルスの命題が唯物史観の立場において誤りではないかと問題を提示したのである。

このような意味において、次には、この命題の解釈に関する代表的と思われる学説をあげることにしたい。

まずソヴェトの学説として、ヴェ・スヴェートロフの見解を見よう。(二)彼はマルクス主義の創始者たちは、これまでのブルジョアのイデオローグたちが家族を形而上学的にとりあつかう立場と根本的に異る方法でとりあつかうものであることを前提として述べ、次のようにいっている。

『「ドイツ・イデオロギー」のなかで、マルクスとエンゲルスは「一般的に物それじたいとして家族を論ずることは不可能である」と主張した。原始社会の家族、奴隷制社会の家族、封建社会の家族などがあるだけである。エンゲルスは「起源」のなかで、個々の社会的、経済的構造のなかで家族が如何に変形したかを示した。

マルクスとエンゲルスによれば、家族関係は社会的生産の特別な様式である。かれらは「ドイツ・イデオロギー」のなかで、最初から歴史的発達の経過も含めて、第三の関係は、日日あらたに自分自身の生活を生産する人々が繁殖するために他の人々を生産しはじめる。すなわちそれは――夫と妻、親と子の関係であり家族であると書いている。

しかし、この社会的生産の様式―家族―はその他の生産様式―生活手段と労働用具―に従属する。マルクスとエンゲルスは家族の実質的根拠を所有関係にあると指摘する。所有関係、生産手段の変動は、それに照応する家族生活の変動をもたらすのである。

エンゲルスの本書の初版の序文には、不正確な公式づけがなされている。すなわち本書には「一定の歴史的時代および一定の国土において生活する人々の社会的諸制度は、二種類の生産によって制約される。すなわち一方では労働

の発展段階により、他方では家族の発展段階によって」といわれている。人々の生産行為と家族関係が同時に社会の基礎であるとする観念がつくり出されている。しかし実際においては、ただ一つの基礎が存在する。社会生活の一つの土台―すなわち生産様式である。家族もそのなかに含めて社会生活の他のすべての面は、社会生活のあらゆる段階における自己の生存と生産様式の発展に制約される。

エンゲルスは、それ以前においてもまたそれ以後においてもこの命題をどこにも繰り返してはいない。かえってかれは同書のなかで、例えば一夫一婦家族への移行の原因は奴隷制生産方法の出現にあると、いっている。

すべてこれらのことは、前述の序文の不正確な定式づけが、エンゲルスにとっても典型的なものではなく、社会史における家族の役割と地位に対するかれの見解の本質を表現していないと考えるための強固な基礎を与えるものである。』（傍点―青山）(一二)

つぎにはエム・ミーチンの所説を掲げよう。(一三)

『エンゲルスは、この命題において、史的唯物論にかんする自分自身の見解とちがって、また社会生活における物質的富の生産様式の決定的意義にかんするマルクスの一般に知られている命題とちがって、社会の発展における決定的要因をなすものは、二つの原理、すなわち、社会的生産と家族であると主張している。エンゲルスのこの命題は、あきらかに誤っている。

マルクスは、モルガンの著書「古代社会」への概要(一四)において、家族が社会生活の決定的要因ではないこと、家族自体が所与の社会における支配的な社会制度の産物であることにまさしく注意をむけている。家族の形態は、社会生活の種々の段階において支配的な生産様式に依拠して、歴史のうちで変化する。それ故に、家族は、社会の発展の決定的原因として、物質的生産と同列におかれることはできない。このことをその著「家族、私有財産および国家の起

源」のなかでエンゲルス自身が引用している多くの資料が完全な正確さをもって物語っている』（傍点―青山）。

以上のヴェ・スヴェートロフやエム・ミーチンの所説は、たんに学者の個人的見解にとどまってはいないようである。今日ではこのような見解は、ソヴェトにおいては、かなり一般的のようにもみられる。

というのは、一九四一年のモスクワのマルクス＝エンゲルス＝レーニン研究所出版である「マルクス＝エンゲルス・アルヒーフ」第九巻の序文や、また一九五〇年モスクワの外国語文献出版所が編集したマルクス・エンゲルス二巻選集に収められたテキストを原本とした一九五三年のディーツ版「起原」の解題も、同じような見解を示しているのである。すなわち前者は次のようにいう。

『この命題は明白に誤りである。なぜなら、家族は、社会の発展を規定する原因として、物質的生産と同列におきうるものではないからである。社会の発展、家族関係の形態をふくめての社会生活のすべての側面の発展を規定する原因は、物質的生産様式である。エンゲルス自身が、その著作「起原」において、この思想をうらづける大きな事実的材料をあげている』(一五)

また後者はいう。

『ここで、エンゲルスは種の繁殖と生存手段の産出とを社会の発展ならびに社会体制の発展を規定する条件として並置しているかぎりにおいて、ある不明確さをおかしている…しかしながら彼の著作「起原」の中では、エンゲルス自身は、物質的生産様式が社会の発展ならびに社会体制の発展を制約する基本的要因であることを、具体的資料の分析によって示しているのである』(一六)

そこで、以上にかかげたソヴェトの学説をかんたんに要約してみると、次のようにいえるであろう。

「起原」に述べた問題の命題は、それじたいは誤りである。あるいは誤りとまではいえないにしろ、ある不明確さ

をおかしている。しかしながら「起原」全般を通じて、エンゲルスの基本的立場を読みとるならば、エンゲルスは物質的生産様式が家族の形態をふくめて社会の発展を規定するものとしているのであり、けっして家族をもって社会発展を規定するものとはしていない。家族と物質的生産様式を同列においているのではない。いいかえるならば、エンゲルスは正当な唯物史観の一元性にたっているのであり、歴史的契機の二元性を肯定するものではないのである。

わが国では柳助教授の見解がこれまであげたソヴェトの学説にちかい。柳助教授は次のようにいわれる。

『エンゲルスは「起原」初版序文において、…歴史における究極の規定的要因が直接的生活の生産・再生産である、という正しい表現をしている。しかるに、かれはこの「直接的生活の生産」なる概念のうちに、本来の意味における生産、すなわち生活手段の生産とならんで、人間そのものの生産、すなわち、種の繁殖もしくは家族を含めている。そのことからして、かれは、人間がそのうちで生活するところの社会制度は二つの要因によって、すなわち、一方では労働によって、他方では家族によって規定されるという、かれみづからが確立したかの史的唯物論の一般的命題と矛盾する、不正確な表現をなしているのである。

このようにみるとき、エンゲルスの命題は、「起原」初版序文の前段、すなわち史的唯物論の一般的命題として表現されている部分にかぎってのみ、史的唯物論の一般に承認されている定式に合致していないのである。エンゲルスの命題は、この点にかぎっては批判されねばならない。しかしながら、そのことは「起原」のなかをつらぬいているかれの方法が全面的に誤っていることを意味するのではない。この点を除いては、かれは、この書ならびに他の労作においては、史的唯物論の命題を正しく適用しているのである。エンゲルスは、「起原」の本論のなかで、家族の諸形態は、社会の生産様式—それは社会の物質的生産力と生産関係との統一である—の変化、発展に応じて、変化し、発展することを示している』(一七)と。

このように、柳助教授はエンゲルスは基本的には史的唯物論の正しい立場にあるものとし、「起原」の命題の後段についてきわめて特徴的な説明をしている。すなわちこの後段の部分はさきにもあげたように玉城教授によってその重要性を指摘されているがこうである。

『労働がなお発展していなければいないほど、その生産物の量、したがってまた社会の富が、制限されていればいるほど、益々強く社会秩序は血族紐帯によって支配されるようである』

柳助教授はこの「支配されるようである」の表現を重視する。原文では erscheint die Gesellschaftsordnung beherrscht durch Geschlechtsbande であるが、柳助教授はこれを『支配されるものとして現象する』と解する。そして『社会秩序は血縁の紐帯、すなわち家族関係によって支配されるという現象形態をとる』という意味に理解し、『ここでは、何が何を規定する、という本質の問題はまだ直接的な形態では出されていない…』とされるのである。

かくて柳助教授は、家族関係によって支配される現象をとる場合にも、エンゲルスは生産力を問題にしていないのではない。こういう『現象形態をつくり出しているのは生産力の低位にほかならない』と理解しているとみるべきである、と考える。そして結論として、『命題後段には、全体にわたって、社会の発展は、究極において、社会の生産様式の発展によって、就中、生産力の発展によって、規定されるという史的唯物論の一般的命題が正しく表現されている、と言いうるのである』(一八)といわれている。

四

以上は、命題に関し玉城教授とは理解を異にすると思われる学説を整理したのであるが、次には玉城教授と同じ立場にあるとみられる説をとりあげてみたい。玉城教授じしんはあげておられないが、今中教授の説が注目される。

今中教授はさきにあげたミーチンのエンゲルス批判は誤りであるとして次のようにいう。

『衣食住とくに食と、性とは、生物にとって最も基本的な要求であって、とくに人類にとっては、最も原始的な、生活上の規定であることは明白である。とくに食と性とは決して互に相補うものではなく、ほんらい全く異る生活内容をなしている。その場合に、原始人類社会においては、食生活の問題が極めて軽微であるのに反して、性が絶対的な問題となっている。そのような原始社会においては、食生活は殆ど社会を規定する力をもたないのに反して、性生活は却って社会制度の基本的な規定をなさねばならない……原始的な社会段階においては、生産関係が、いまだ「経済関係」とよび得るような状態をもたず、もっぱら、人類それ自体を生産するための性生活のみが、この社会を支配する生産力であって、この生産力の内容をなすところの生産手段は、人間それ自体の肉体にほかならない……

もとより、このような原始社会でも史的唯物論の原理は一貫して認められなければならないが、この原始的社会段階で、歴史的発展を決定する要因としての、「直接的なる生産および再生産」は人類それ自体の生産すなわち人類増殖としての、家族とその血縁的関係が、生産力そのものの内容をなしているといわなければならない。

故に、エンゲルスが、社会的生産様式の二種類として提示している「労働」と「家族」は決して併行的なものと考えられているのではあるまい。だから彼は、労働の未だ発達していない原始社会では、ただ「血縁的紐帯によって社会秩序が支配されるように見える」（傍点原文のまま）と言っているのであり、この「血縁的分化組織の中に、おのずから労働の生産性がしだいに発展してくる」と説いているのである。

これによって、エンゲルスがこの場合には、「労働」の生産力を最終的な歴史発展の決定的原因として否定しているのではないことが明らかである〔る〕……』(一九)

以上の今中教授の所説は、要約すれば、記録された歴史以前の社会においては、社会を規定する力をもつのは生活

手段の生産様式ではなく、人類の生産であるところの血縁関係や両性関係である。エンゲルスの命題はこのことを正しく示している、ということになるであろう。

さて、玉城教授の「命題」についての考えは、これまで、多少は触れてきたが、基本的には右の今中教授の所説と同一範疇に入るべきもののように思われる。以下多少系統的に玉城教授の所説をまとめてみよう。

玉城教授はさきにあげた私の見解を反駁されたのち、エンゲルス支持者たちの見解も十分明らかではないとし、エンゲルスを正しく理解するには「命題」の後の部分、すなわち『労働がなお発展していなければいないほど、その生産物の量、したがってまた社会の富が制限されていればいるほど、益々つよく社会秩序は血族紐帯によつて支配されるようである……』を重視すべきであるとされる。

そしてこの部分でエンゲルスのいっているところを次のように理解すべきものとされる。

『エンゲルスはすべての社会が物質的生産の関係と血縁的関係とによって、同時的に、或いは同じ強さによって制約されるとかいっているのではない。二つの関係のうちいずれが決定的な重要さをもって社会発展の究極的な要因となるかは、人類社会の発展段階によって異なるのだというのである……』(一〇)

かくして玉城教授はエンゲルスは社会の発展段階と血縁的団体との関係を理論的に述べるとともに「家族の起原」の本文において明らかにされている両者の関係についての結論を序文において理論的、集約的に述べているとされ、エンゲルスのいわんとするところは『家族が自然的条件によって発展せしめられる段階における社会は、より強く(或いは決定的に強く)自然的な人間の関係、すなわち血縁関係によって規定されるが、新らしい社会的原動力、すなわち社会的富によって発展せしめられる段階の社会は、より強く富の社会的生産の関係によって規定されることになる』(一一)というのである。

もっとも玉城教授はこのような結論に対して『なに故に、原始社会においては血縁的紐帯が規定的な意味をもち、富の差別・階級的差別等々の生じた社会においてはむしろ逆に家族の秩序は全く所有の秩序（生産の関係）によって支配されるようになるのかという問題』[二二]が残されている、というきわめて適切な疑問を提示する。しかしこれに対しては答えを用意されず、エンゲルスの序文の見解を「ドイツ・イデオロギー」によって裏付けるのである。

ここでは玉城教授が引用された「ドイツ・イデオロギー」の本文の採用を省略するが、エンゲルスの命題と「ドイツ・イデオロギー」に示された理論が一致していることは、すでに古くライハルトによっても主張されている。ただライハルトは玉城教授と異り「ドイツ・イデオロギー」において家族と表示されたところのものが、のちにモルガンの「古代社会」が現るや、マルクス＝エンゲルスは血縁関係として語ったと述べ、かつ「ドイツ・イデオロギー」の解説において、歴史的発展のうちに入り込んでいるところの決定的な「契機」もしくは「関係」としてとくに家族の言葉を避け、氏族の繁殖としていることが注意されるのである。[二三]

これを要するに、玉城教授によれば、エンゲルスの史観は「ドイツ・イデオロギー」の場合も「起原」の場合も同一なのである。「ドイツ・イデオロギー」も『……この家族なるものは、はじめのうちは唯一の社会的関係であるが後になって、欲望の増大が新たな社会的諸関係を産み出し、人口の増加が新たな欲望を産出するようになると、一つの従属的関係となる……』といっているとされる。[二四]

玉城教授が「ドイツ・イデオロギー」を引用した理由の一つは、おそらくスヴェルドフなどの指摘する「起原」の命題の提言は、エンゲルは「起原」の以前においても、その後においてもどこにもくり返していないということに対する反対であろう。しかし「起原」の命題と「ドイツ・イデオロギー」が同じであるということからは、ただちに命題が正当であることにはならないであろう。「ドイツ・イデオロギー」が家族を歴史的発展の契機としているなら

ば、命題の二元論と同一の立場のように思われ、正しい唯物論とはいえないといいうるのである。

今中教授、玉城教授はエンゲルスの命題を全面的に肯定し、しかもエンゲルスの立場が正しい史的唯物論の家族史への適用と考える。

しかし私は度々いうように、エンゲルスのこの命題を正しい唯物史観に立つとすることは問題であると思う。じつはこの命題だけではなく、エンゲルスじしんが「起原」の全般を通じて正しい唯物史観を展開しているかどうかが問題とされてよいのである。その意味において次にはエンゲルスに対してもっとも批判的な江守助教授の見解をあげよう。

江守助教授はエンゲルスが種の繁殖（あるいは家族—青山）を独自の歴史的契機として定立したことをまず批判する。『Engels は「歴史における究極的な決定的契機」の「二重の性格」として物質的生産とともに《種の繁殖—Fortpflanzung der Gattung》を提示し、この二つの歴史的要因の作用をもって彼の「家族起原論」を体系化したのであるが、物質的生産のほかにそもそもかような種の繁殖を歴史的契機として承認することが唯物史観の一元性を毀損することになるのではなかろうか、という疑問が当然懐かれる』[二五]と。そして、この命題が「ドイツ・イデオロギー」の中に定立されたものと一致することを認め、「起原」の命題も「ドイツ・イデオロギー」の立場もともにマルクス＝エンゲルスの唯物史観の本来的な方法とは合致しないことを詳細に論じられるのである。以下に示すのはその要点である。

『種の繁殖を物質的生産とならんで一つの独自の歴史的契機とみなす二元的な方法が唯物史観の立場に背馳することを認めるとともに、さらに、Engels の家族起源論の著作そのものも、かかる誤れる歴史的考察方法の上にたって実際にも書かれたものであるのである。詳細に彼の家族起原論の全体系を考察するならば、彼が原始社会の歴史的発達の原動力として物質的生産とともに「種の繁殖」の契機をも実際に彼の理論図式の中に採用していることが瞭かと

なるのである。いな、ある段階までは、種の繁殖こそが基本的要因とみなされている……。実際彼は「自然淘汰の原理」によって全原始社会史を考察せんとしたのである』すなわち『彼は配偶婚家族（通常の用語例では対偶婚家族である—青山）にいたる全家族原史をば首尾一貫して「自然淘汰の原理」—それは婚姻共同態の縮小化を促す—によって跡づけたのである。そして配偶婚の成立を画期点として、それ以前の歴史的発展は、以前の段階におけるような自然淘汰の原理によってではなくて、新しい別の「社会的」な原動力—すなわち、私的所有の発展—によって推進せられると論じたのである。彼は、私的所有の形成過程において、配偶婚からの一夫一婦制への移行—それは、母権的出自の顚覆、男系出自と父系相続法の成立、家父長制家族の形成を経過しておこなわれるが—を究明したのちに、次のように述べている。それ〔一夫一婦制〕は、自然的諸条件 natürliche Bedingungen ではなくして、経済的諸条件 ökonomisehe Bedingungen に基礎づけられた最初の家族形態であった。すなわち原初的な自然生的共同所有 das ursprüngliche naturwüchsige Gemeineigentum に対する私的所有 Privateigentum の勝利に基礎づけられた最初の家族形態であったと。彼がここで≪自然的諸条件≫と≪経済的諸条件≫と対置した論理は、実に、かの≪種の繁殖≫と≪生活手段の生産≫の二つの歴史的契機によって人類社会史を追求しようとする歴史的考察方法を示すものにほかならない。そして彼は、私的所有の形成までの人類社会の史的発展を前者の契機、すなわち、自然的諸条件によって分析し、それ以後の発展を、後者の契機、すなわち、物質的生産という経済的諸条件によって解明せんと試みた……彼の家族起源論の全体系は実際に、二元的な歴史的契機による説明をもって貫かれているのである』(二六)。

以上、「起原」の命題をめぐる目ぼしい学説をあげたのであるが、けっきょく、この命題に関するかぎりエンゲルスが二元論であるとの批判は避けられないと思う。「労働」と「家族」が併置されているのは二元論ではなく、人間

の生活の二つの面であり、エンゲルスは、そのいずれの一方が支配的な意味をもつかは社会の発展段階階によって異るとみているとする考えは、この命題の前半と後半とを矛盾なく理解しようとするものであるかもしれない。しかし、どのような社会の発展段階においても、それぞれの発展段階における物質的生産力が一切の社会制度―家族も当然含まれる―を規定すると考えることが唯物史観としては正しいと私には思われる。そして原始社会という特定の発展段階にかぎって、家族が社会制度を規定するという考えはやはり二元論といわねばならない。マルクスは『家族が社会生活の決定的原因でないこと、家族自体が、所与の社会において、支配的な社会体制の産物にすぎないことに、注意をむけている』とミーチンは指摘している。私はこのような見解こそ唯物史観の本来の立場である『物質的生活の生産様式によって、社会的、政治的および精神的生活過程一般がどうなるかがきまる』（マルクス「経済学抑判」）の命題に一致するものであると思う。

以上論及したエンゲルスの命題に関しては、じつはきわめて早く、クノーが痛烈な非難を加えていたのである。クノーはこの命題をもって『唯物史観の統一を全くやぶったもの』と批判した。ところでエンゲルス擁護者は、このような論難は『現在の単婚のまえには、無制限性交関係や血縁家族、群婚家族という性的共有の諸形態があったというモルガン＝エンゲルスの理論の否認をむすびつけている』ことにねらいがあるといっていることはきわめて注目されるのである。クノーのねらいが、はたしてそのようなものであったかどうかについては私は断言を下しえない。ただ私としては、乱婚にはじまり集団婚をへて一夫一婦制家族に終るモルガン＝エンゲルスの家族発展段階階説は、けっして唯物史観の立場からしても動かすことのできぬ家族史ときめてしまうことは適切でないと考えるのである。

玉城教授は『モルガンが婚姻及び家族の発展段階が生活資料の生産の進歩に従って区分した時代区分の定立とを密接にからみ合せたとき、初めて婚姻は社会科学的な範疇として把握される第一歩をふみ出した』といわれるが、この

両者のからみ合せは―エンゲルスの場合も同じである―必然的理由をもってはいない。人類の最原始状態において私有財産制度が存在せず原始共有制が行われたとしても、そのような社会において、何故乱婚あるいは血縁家族が存在し、集団婚が行われたかは説明されていないのである。いいかえれば、乱婚や集団婚の存在がその社会の生産力からは直接ひき出されてはいない。せいぜい『労働がなお未発達であればあるほど……社会秩序はそれだけ圧倒的に血縁紐帯に支配されるものとしてあらわれる』といわれるだけである。

私はエンゲルス（モルガンについても同様である）にとっての致命的欠陥は―おそらく当時の資料の乏しいことが原因であろうが―未開社会において一夫一婦制度がきわめて一般的な存在であることを知らなかったことである。私はもし彼等がこのような事実をはっきり把握していたならば、彼等の科学的精神をもってすれば、家族発展の図式は別な構成をとっていたのではないかとさえ考えられるのである。そして今日、エンゲルスが対偶婚家族にいたる全家族原史を一貫して自然淘汰の原理―それは婚姻共同態の縮少化を促す―によって跡付けていることは正しい唯物史観の上に立つものでないとの批判もあるわけであるが、もしエンゲルスが乱婚や集団婚を前提としなかったならば、このような非難をも受けないですんだかもしれないのである。

私は乱婚や集団婚の存在が否定されるにしろ、それによって唯物史観そのものまでが否定されたと考える必要はない。むしろそのようなとらわれた仮説をすて、新しい家族史を構想することが、われわれに課せられている重要な課題だと思うのである。ソヴェトの近時の学説が―乱婚や集団婚は別として―個別科学のあげた新しい成果を積極的にとりいれ、これによって唯物史観を創造的に発展させることに努力しているといわれることは、(二七)大いに注目させられるのである。

（一）中川他編「家族問題と家族法」Ⅰ「家族」（以下「家族」として引用）所収。
（二）玉城肇「家族集団と社会発展の関係」法律時報三二巻一三号五〇頁以下。
（三）エンゲルス「起原」（西雅雄訳・岩波文庫版）八頁。
（四）玉城前掲論文五〇頁。
（五）「家族」五二頁。
（六）玉城前掲論文五二―五三頁。
（七）「起原」七頁。
（八）「起原」九頁。
（九）青山「マルキシズムと家族法」（「近代家族法の研究」五五―五六頁）。
（一〇）玉城前掲論文五〇頁。
（一一）ヴェ・スヴェートロフ「エンゲルス著〈家族、私有財産および国家の起原〉について」ポリシェヴィーク誌一九四〇年一二月号。この論文は柳春生助教授が「エンゲルス〈起原〉における家族および国家の問題について」（法政研究二二巻二―四合併号）で詳しく引用紹介されている。私は中川高男助教授の好意によりその訳稿（全訳）を参照することができた。
（一二）前掲論文中川訳稿六一―六七枚目による。
（一三）エム・ミーチン「マルクス・レーニン主義哲学思想の発展における同志スターリンの著作〈弁証法的唯物論と史的唯物論〉の役割と意義」。私の引用は柳助教授の前掲論文による。
（一四）このマルクスの著書はおそらく布村一夫教授が紹介した「遺稿〈古代社会〉ノート」であろう。この書は布村教授によれば Karl Marx, Conspectus of Lewis H.Morgan,s Ancint Sccieiy, Moscow としてロシア語になおされて出版された（歴史評論一九五五年九月号）そうであるが、日本訳はない。エンゲルスが「起原」の序文で、私の著作は、ただわが故友が不幸

にしてもはや成就し得なかった云々といい、「しかしモルガンからなされた彼の詳しい抄録」といっているのは、この書をさしているわけである。したがって、「起原」を理解する場合に、ミーチンの引用したマルクスのこの言葉はきわめて重要である。

（一五）柳前掲論文二二頁より引用。

（一六）江守五夫「法民族学の基本的課題」（「今日の法と法学」三三八頁）より引用。

（一七）柳前掲論文一三八頁。

（一八）前掲一三九頁。

（一九）今中次麿「エンゲルス〈起原〉の序文における二、三の問題」法政研究四―五頁。なお今中教授はこの論文発表後公刊された「政治権力の政治的構造」（一九五七年）にこの論文をほとんどそのまま収録されている。

（二〇）（二一）玉城前掲論文五二頁。

（二二）前掲五三頁。

（二三）ライハルト前掲書四一頁。四二頁参照。

（二四）玉城前掲論文五四頁。

（二五）江守前掲論文三三八頁。

（二六）前掲三四〇頁。

（二七）稲子恒夫「家族の起原と将来」〈海外紹介〉（唯物論研究一九六一年春号八三頁以下）参照。この紹介はエンゲルスの「起原」に対するソヴェト学界の動向を知る上においてきわめて重要である。

〔附記〕私は文中に唯物史観と史的唯物論の二つの言葉を用いた。これは引用したそれぞれの著者の用語がちがうので、あえて統一しなかったのである。